

懸想文

奈良時代より昔から聖地として信仰されてきた箕面の山々。その入り口を守るようにたたずむ『聖天宮 西江寺』には恋を叶え、良縁に恵まれたいと願う人々が求める御札があった。

きもち届けるえんむすび



『懸想文』とは？

良縁成就や商売繁盛、家内安全を叶える御札で、元々は「想いをかける相手に送る文」、つまりラブレターの意味。昔は文字が書けない人や忙しい人のために手紙を代筆する文化があった。江戸時代の京都などから御札として広まった。



▲「人にこそ聞く神佛、縁を結ぶ歓喜天…」中には良縁を祈る縁起のよい文が書かれている

恋文の形の御札 ご利益は縁結び

阪急「箕面駅」から坂道を登っていくとたどり着く真言宗の寺院『聖天宮 西江寺』（以下、同寺）。開山から1300年以上の歴史があり、「みのおの聖天さん」として地元で親しまれているが、参拝者の中にはある願いを胸に訪れる人もいる。その願いとは、ずばり縁結びだ。

同寺で授与している「懸想文」は恋文の形をした御札。玄関や軒下、床柱にさして飾ると美男美女になり、良縁やお金に恵まれるとして、先代住職の時代から参拝者に求められてきた。同寺の現住職、小倉観裕さんは「メールやSNSがこれだけ発達した時代に恋文とは奥ゆかしいですが、20〜30代の方もよく来られます」と話す。「結婚で良縁に恵まれたい」、「告白したいけれど勇気が出ない」、「好きな人ともっと仲良くなりた〜い」と思いは人それぞれだ。



聖天宮 西江寺 住職 小倉観裕 さん

3つの信仰が混ざり合う 本尊の大聖歓喜天

「懸想文」を授かった人が「願いが叶いました」と喜んで返しにきてくれたこともあるそう。小倉さんにご利益の理由を尋ねると、同寺の本尊である大聖歓喜天について解説してくれた。

その起源はインド神話のガネーシャにさかのぼる。今もインドでもとても人気の神様だ。「ガネーシャ」は元々暴れん坊の神様でしたが、十一面観音菩薩と出会って改心し、仏の教えにしたがうようになりまし。その姿が大聖歓喜天。ガネーシャ信仰を仏教に取り入れる中で生まれたといわれています」と小倉さん。同寺の本尊は完全非公開のため見ることはできないが、象の頭に人の体を持つ2体の像が仲良く抱き合う姿をしているそう。そこから縁結びや夫婦円満、

歓喜天への供え物「おだん」



本尊の歓喜天に供えられる「おだん」は巾着型の揚げ菓子で、中には数種類の香辛料を混ぜた餡が詰まっている。また浴油供と呼ばれる油を使った歓喜天への祈祷法では大量の油が必要とされていた。やがてこれらの油でイチギョウジカエダの葉の塩漬を揚げて「もみじの葉衣」が作られるようになり、これが箕面名物「もみじの天ぷら」のルーツともいわれている

地域の活動の場所として さらに門戸を開く



蟲塚
蟲塚の「蟲」とは森羅万象あらゆる生き物のこと。毎年10月の第1土・日曜日には「蟲供養」が営まれ、合わせて茶道や華道など風流な集まりが催される

表紙はこの石段で撮影



鳥居
春には新緑、秋には紅葉の美しい鳥居。神仏習合の歴史が色濃く残っている

子孫繁栄の神として信仰されるようになった。「懸想文」には思ひ人との縁だけでなく、仏様や神様との縁を結ぶ意味が込められている。

658年に同寺を開いた役行者は箕面山で修行を積んだ修験道の祖。同寺は仏教と神道、そして山岳信仰が融合した寺院なのだ。秋季大祭の「天狗まつり」では山岳信仰から生まれた天狗

と、神に奉納する神楽がともに踊る。小倉さんは「言ってみればハイブリッド。なんでも調和して取り入れていくのが日本のいいところですよ」と話す。



2月は梅が見頃



対談石

境内にある対談石には「苦行を積んでいた役行者がこの場所で歓喜天の化身である老翁と出会った」との話が伝わる



本堂

本堂の中には十一面観音像が立ち、さらにその奥に完全非公開の大聖歓喜天像が祀られている

参拝者の中には「長年箕面に住んでいるけれど、初めて来ました」という人も意外に多いという。同寺では地域に門戸を広げようと、「写経体験会」などの催しを行っている。地域住民からの呼びかけで、境内を会場として貸し出している毎月1回の「ヨガ&瞑想会」（不定期土曜日）、「瞑想会&茶室体験会」（第3月曜日）は始まって2年を迎えた。「茶室体験会」は、服装や作法にこだわらず気軽に茶道を体験できると人気だ。このように地域から相談を受けることは時々あるのだそう。「騒音など周辺への配慮からお断りすることもありますが、頼まれたらなるべく応えたい。まずはこの場所に足を運んでもらい、知ってもら



取材協力
高野山真言宗
聖天宮 西江寺

住所：箕面市箕面2-1-15-17
（阪急「箕面駅」から徒歩5分）
お問い合わせ：072-721-1319

